

小学校における英語活動

ーコミュニケーション能力の育成につながる英語活動の在り方ー

和歌山市立有功東小学校
教諭 片山久美子

1 研究のねらい

現行の学習指導要領の本格実施に伴い、小学校では、平成14年（2002年）度から、「総合的な学習の時間」における「国際理解に関する学習の一環」として、英語活動が行われるようになった。文部科学省の調査によると、平成15年度に「総合的な学習の時間」を含めて何らかの形で英語活動を行った小学校は全体の88.3%に上り、3年生以上における年間の実施時間は平均11時間という結果が出ている。平均11時間という数字は決して多いとは言えないかもしれないが、全国的に英語活動への関心が高まってきていることを表している。しかし、小学校の英語活動の実施状況は地域や学校によって様々であり、カリキュラムや教材、指導法等、多くの課題を抱えているのが現状である。

本研究では、コミュニケーション能力の育成につながる英語活動のねらいと活動の在り方について考察し、適切な教材選択や具体的な指導法等を研究する。

2 研究仮説

小学校における英語活動が、将来の英語を使ったコミュニケーション能力の育成につながるためには、児童がコミュニケーション活動に意欲的に参加し、そこで得た自信と経験を積み重ねることが重要である。しかし、児童の多くが初めて英語に出会い触れていく中で、英語を使った活動に不安や戸惑いを覚え、意欲的に活動に参加できていない場面に出会うことがある。そこで、英語を使ったコミュニケーション活動を行う前に、英語表現に十分親しむ活動を効果的に行うことで児童に自信を持たせることができれば、より積極的にコミュニケーション活動が行われるのではないかと考え、以下の仮説を立てた。

コミュニケーション活動に至るまでの学習活動において、活動形態に配慮することで児童の心理的な負担を軽減し、英語表現に親しむ活動を効果的に行うことができれば、英語を使ってみたいという意欲が児童の中に芽生え、コミュニケーション活動を積極的に行うようになる。

なお、ここでのコミュニケーション活動とは、身振りや表情、視線等の言語以外の要素も有効に活用しながら、学習した英語表現を用いて行う対話形式の活動を指す。

3 研究の内容と方法

(1) 英語活動のねらいと活動の在り方

私たちは、様々な社会状況の急速な変化の中にあり、それに対応する生き方が求められている。このような状況のもと、国際社会に生きる日本人としての自覚を促し、豊かな人間性や社会性ととともに、自ら学び自ら考える力を培うために「総合的な学習の時間」が設けられた。小学校英語活動は、この「総合的な学習の時間」における「国際理解に関する学習の一環」として位置づけられている。

『小学校英語活動実践の手引』では、英語活動のねらいとして、『英語活動』そのものが異文化に触れる体験となり、さらに、外国の人や文化にかかわろうとするときの手段として、英語を活用しようとする態度を育成することにもつながる。すなわち、言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうことが重要である（※1）」と述べられている。

ここでは、小学校の「英語活動」が、英語に触れ外国の生活や文化に慣れ親しむ「英

語体験活動」であって、言語習得を主たる目的にした「英語学習」ではないことが示されている。小学校の時期に言語習得の成果を急ぐと、児童に負担を感じさせたり、英語に対する興味や関心を失うような活動に陥ったりして、「英語嫌い」を作りかねないとの配慮からである。

本校においても、英語活動を行う際、この点をふまえ、児童の興味や関心に基づいた身近な英語を使って、様々な楽しい活動を行ってきた。

しかし、児童の活動の様子を観察すると、意欲的に活動を行う児童が多い中で、戸惑いや不安の表情を見せ、活動に参加できにくい児童が存在することに気づいた。児童が意欲的に活動に参加できないのは、そこで用いられる英語表現に十分に親しんでいないために、それをゲーム等で活用する段階に至っていないのが主たる原因ではないかと考える。

「一つの英語表現を使おうとすれば、ある程度の繰り返し練習が必要である(※2)」と『手引』の中でも述べられているように、言語習得が主な目的ではないとしても、その表現をコミュニケーション活動で使うためには、ある程度の言語習得は必要であると言える。

また英語活動では、「楽しい活動」という表現がよく用いられるが、英語活動を系統立てて行うには、「楽しさ」についての十分な吟味が必要である。つまり、児童が活動を楽しむだけでなく、そこに言語やコミュニケーションに対する新たな発見や気づきを見出し、次の活動への意欲をわきたてるように活動計画を立てていく必要がある。

そこで、児童の活動への興味や関心を持続させ、知的欲求を満たしていくためには、

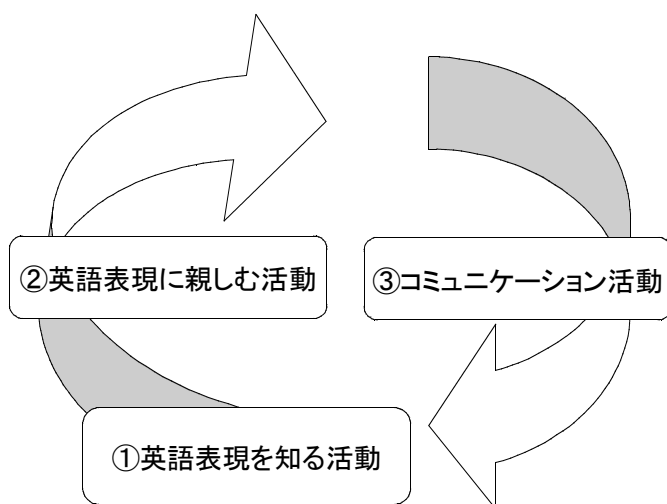


図1 英語活動

①英語表現を知る活動、②英語表現に親しむ活動、③コミュニケーション活動の三つの活動が必要であると考えた。また、これらの活動は、互いに関連しながら英語活動を構成するものである(図1)。

もし、②の「英語表現に親しむ活動」が十分になされずに、③の活動に入った場合、まだ英語を活用する段階に至っていない児童は、戸惑いや不安を感じ、楽しんで活動に参加できないということが起こり得る。それに対し、自然で無理のない方法で、②の「英語表現に親し

む活動」が十分に行われれば、クラスの誰もが楽しく英語を使ったコミュニケーション活動に参加できると考える。しかし、②の「英語表現に親しむ活動」を効果的に行うには、単調な繰り返し練習や定型的なドリルを用いるのではなく、児童が楽しんで活動を行えるような工夫が重要である。

このように、「英語表現を知る活動」、「英語表現に親しむ活動」、「コミュニケーション活動」の三つの活動が効果的に行われることで、英語に対する興味・関心や意欲を引き出し、英語を活用しようとする態度を育成することができ、より豊かなコミュニケーション活動が期待できる。

(2) 英語表現に親しむ活動

英語表現に親しむ活動には、TPR（全身反応指導法）、英語の歌やチャンツ、英語の絵本の読み聞かせなどがふさわしいと考える。

ア TPR (Total Physical Response)

TPR とは、米国の心理学者アッシャー（James J. Asher）が1960年代に提唱した、

言語活動と全身動作を連合させ、五感のすべてを駆使して言語を習得させようとする指導法である。それは、幼児が母語を発話する前に、聞くことに専念し、それを動作に連結させていくという母語を習得する時の方法をモデルとしたものである。原則的には、指導者が発する指示に対して、学習者は全身を使って反応することが求められる。学習者は、発話を求められることがないので、心理的な負担が少なく、言語学習の初心者には効果的であると言われている。

この指導法を取り入れることにより、英語活動の初期段階から、

聞く → 理解する → 行動で示す

の一連の活動を通じて、英語活動を楽しみに行うことができる。また、指示の内容を変えることで、「立つ、座る、歩く」等の身体を動かすだけの単純な活動から「色を塗る、線を描く、指示に従って何かを完成させる」というような複雑な活動へと発展させていくことができる。

イ 英語の歌

英語の歌の活用は、活動への導入や授業展開において、児童に学習への興味や関心を持たせ、意欲を高める効果がある。また、英語のリズムやイントネーションに慣れ親しみ、英語表現を自然に身に付けるための反復練習としても利用できる。さらに、ジェスチャーや手拍子などで変化を加えることによって、繰り返し行っても飽きることがなく、英語表現に親しむ機会を増やすことができる。

歌を教材として使用する場合は、次の点に考慮して選択することが望ましい。

(ア) 覚えやすく簡単なメロディーの歌

児童にとってなじみの少ない英語の歌詞で歌うことを考えると、メロディーは、できるだけ聞き取りやすく歌いやすいものが望ましい。しかし、高学年になると、単に簡単だけでは満足できなくなる傾向があるので、児童の関心を捉えるための選曲の工夫等が必要である。

(イ) 歌詞に繰り返しの多い歌

メロディーに合わせて英語表現が同じパターンで出てくると、歌いやすいだけでなく耳に残るので、英語表現の定着につながっていく。

(ウ) 意味のわかる歌詞を使用した歌

児童にとって意味のわからない歌詞を歌うのではなく、学習する英語表現と歌詞が対応していれば、歌いながら無理なく自然に英語表現を身に付けることが期待できる。

(エ) 自己表現が可能な歌

言葉だけでは自分の気持ちなどを表現するのに抵抗がある場合でも、歌を用いると、表現活動が容易になることが考えられる。さらに、歌にジェスチャーをつけたり替え歌にしたりすることで、児童が歌をより親しく感じ、個性や創造性を発揮し、自己表現が容易になると期待できる。

(オ) 自然なリズムやイントネーションで歌われているもの

市販されている英語の歌の CD やテープには、メロディーに合わせるために母音が必要以上に長く伸ばされていたり、前置詞や冠詞が強く長く歌われていたりするものがある。歌を教材として利用する場合は、歌として優れていることよりも、自然な英語のリズムやイントネーションで歌われているものを選択することが望ましい。

ウ チャンツ

チャンツとは、リズムに乗って英語を話す活動で、英語特有の音とリズムに親しむのに有効である。歌のように音程がないため、歌があまり得意ではない児童も楽しく活動することができる。なかでも、米国のキャロリン・グレアム（Carolyn Graham）が考案したジャズ・チャンツは、ごく自然な話し言葉としての英語が、ジャズのリズムに乗せて取り入れられているので、そのリズムの躍動感が児童の心

を捉え、英語の音や強勢、イントネーションを身体全体で取り入れるのに効果的であると考え。また、児童の学習活動や実態に応じて、学習する英語表現に対応した歌詞を織り込んで創作し、利用することもできる。

エ 英語の絵本

絵本の読み聞かせを楽しみにしている児童は大変多い。絵から様々な情報を読みとろうと懸命に目を凝らし、物語に聞き入る。外国の絵本の場合、絵や話の中から、文化的な共通点や相違点を発見し、異文化に対する興味や関心を引き出すこともできる。絵本の選択に際しては、児童の心を捉え、情緒を育てるような絵が描かれているものを選びたい。また、そこで使われている英語表現は、それまでの英語活動で用いた表現であるか、そうでない場合は、事前に簡単に説明して理解できる難易度のものが教材としてふさわしい。

学習段階が進んでいくと、絵本の絵を見て、児童自身が自分で物語を作るという活動に発展させることもできる。

(3) 活動形態の配慮

コミュニケーション活動を行う場合、基本的には、一人で英語を話せるようになることが重要である。しかし、児童にとって、慣れない英語を一人で話すということは、かなり心理的な負担を伴うと考えられる。そこで、活動形態に配慮することが重要である。

活動形態には、全体活動、グループ活動、ペア活動、個人活動があり、構成人数が少なくなるほど、児童の心理的な負担は大きくなる。しかし、これらの活動を順に経験していくうちに、児童は、だんだんと英語表現を身に付けることができ、心理的な負担が小さくなり、一人でも話せる自信がついてくると考えられる。したがって、個人活動の前に、図2のように、全体活動、グループ活動、ペア活動などを行い、英語表現に親しむ時間を十分に確保することが重要である。

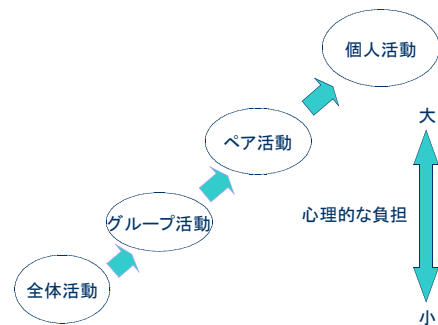


図2 活動形態の流れ

つまり、これらの活動形態を効果的に取り入れることにより、児童の心理的な負担が軽減され、楽しみながら英語表現に親しむことができ、コミュニケーション活動への意欲が高まると考える。

(4) 検証授業計画における配慮事項

検証授業を実施するにあたり、これまで述べてきた活動及び形態を取り入れ、さらに以下の点に配慮して授業計画を立てる。

ア 実際に英語を活用する場の設定

英語活動が「英語を使った楽しい活動の体験」で終わるのではなく、それが、英語を使ったコミュニケーション能力の育成につながるためには、児童の英語を話したいという意欲をいかに高めるかが重要である。指導者や友達との英語を使った活動においてもそれは可能であるが、本研究では、英語を活用したいという意欲をさらに高めるために、アジアの国々からの留学生を活動に招くことを計画する。留学生と英語を使って話をするという目的を明確に持たせることにより、児童はより意欲的に活動するだろうと考える。

また、英語圏の人々ではなく、非英語圏の人々と英語によるコミュニケーション活動を行うことを通じて、世界とつながる言語としての英語の役割を認識するであろう。

「国際理解に関する学習の一環」として、生活や文化の相違点に気づくだけでなく、多くの共通点を見出すこともできると考える。さらに、留学生の出身国にまで思いを馳せ、世界に向けて興味や関心が広がっていくと考える。

イ 教材・教具

日本語を介して英語を理解するのではなく、実物や模型、写真、絵、カード等様

々な教材・教具を効果的に利用して、英語が直接理解できるような工夫をする。また、児童を自然な英語の発音やイントネーションに親しませるために、CD や MD、ビデオや DVD 等の視聴覚教材を有効に活用する。

ウ クラスルーム・イングリッシュ

英語活動で扱う英語表現の他に、教室で日常的に使われる指示や活動を促したり励ましたりする英語表現をクラスルーム・イングリッシュと言う。このクラスルーム・イングリッシュは、繰り返し何度も使われる表現でもあるので、児童がその場の状況、指導者の表情やジェスチャー等から、意味を推測し内容を理解することができる。また、英語のイントネーションや個々の音声や表現に慣れることができる。

したがって、英語活動の際には、指導者も児童も、できるだけ日本語を用いない約束をしておき、クラスルーム・イングリッシュで授業を進めていきたいと考えている。しかし、すべてを英語で進めることは、児童が内容を理解できないまま活動が進んでいく恐れがあるので、日本語の説明を適宜入れることが必要である。

エ 学習環境作り

国際理解に関する学習としての英語活動を楽しむ効果的に進めるために、学習環境作りは重要な要因である。

空き教室などを利用して、英語活動の教室を用意できれば、掲示物などで雰囲気作りをし、机は置かずに広い空間を確保して活発な活動を促すことができると考える。英語活動専用の教室がない場合は、普通教室で机を廊下に出すことにより、十分に活動できる空間を確保して行う。

(5) 検証授業計画

- ア 期間 平成16年10月4日（月）～11月26日（金）のうち7日間
- イ 場所 和歌山市立有功東小学校 第3学年1組及び2組の各教室
- ウ 指導者 学級担任と英語担当教師によるティーム・ティーチング
- エ 対象 第3学年1組(33人)及び第3学年2組(34人)
- オ 単元名 「留学生との交流を楽しもう」
- カ 単元目標 学習したやさしい英語表現を使って、コミュニケーション活動を楽しむ。

キ 指導にあたって

検証授業に先立ち、児童の学外での英語に関する学習状況を調査した。その結果、3年1組では、学習をしている児童は9人(27%)、学習経験のない児童は24人(73%)、3年2組では、学習をしている児童と学習経験のある児童を合わせて15人(44%)、学習経験のない児童は19人(56%)であった。最近の児童や保護者の英語に対する関心の高さが伺えると同時に、児童の英語の学習経験にすでに差があることがわかる。これらのことから、初めて英語に接する児童が負担を感じないように、また、すでに英語学習の経験がある児童が退屈さを感じないように、十分な配慮を行う。

ク 検証の方法

仮説を検証するために、全7時間のうち第2時は、「英語表現を使った楽しいコミュニケーション活動」に重点を置いた指導を行う。その他の時間は、仮説にあるように、活動形態に配慮して「英語表現に親しむ活動」を効果的に行い、それが「英語表現を使った楽しいコミュニケーション活動」に生かせるような指導を行う。この2種類の形態の授業について、授業中の行動観察やビデオ録画による授業の分析、児童振り返りカード等により、学習状況の比較を行い、検証する。

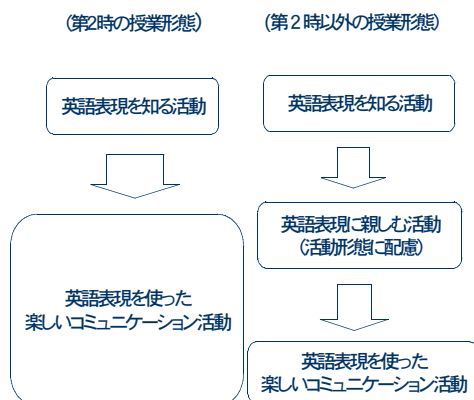


図3 授業形態の比較

ケ 単元計画 (全7時間)

	目標及び英語表現	児童の活動及び活動形態 (①・・・英語表現を知る活動 ②・・・英語表現に親しむ活動 ③・・・コミュニケーション活動 全(全体活動) G(グループ活動) P(ペア活動) 個(個人活動)	活動への支援 及び指導上の留意点 ☆評価規準
第1時	- 英語の挨拶の表現に慣れる。 "Hi. How are you?" "I'm fine. Thank you." - 身体の部位の語彙を使った活動を楽しむ。 head / eyes / nose / mouth hair / shoulders / knees / toes	(①全) 英語の挨拶の表現"Hi. How are you?" "I'm fine. Thank you."の表現を知る。 (②全) "Hi. How are you?"の歌を歌う。 (②G) 2グループに分かれて会話形式で歌う。 (②P) 二人組になって会話形式で歌う。 (③個) ウォーキングゲーム(自由に歩いて行って、出会った人と会話する)を行う。 (①全) 身体の部位の語彙を知る。 (②全) "Head, Shoulders, Knees, and Toes"の歌を動作をつけながら歌う。 (②全) TPR活動("Touch your head."等の指示を聞いて動作を行う)をする。	- お互いが会話をしているような気持ちで歌うよう促す。 ☆意欲的にコミュニケーション活動をしている。(行動観察) ・現段階では、明確に言えなくとも、聞いて行動できることに重点を置く。
第2時	自分の名前の伝え方と相手の名前の尋ね方を知りその表現を使ったゲームを楽しむ。 "My name is ~. What's your name?"	(①全) 自分の名前の伝え方と相手の名前の尋ね方を知る。 (③個) リレーゲーム("My name is ~. What's your name?"の会話をリレー形式で次々と会話していく)を行う。 (③個) ウォーキングゲームを行う。	・活動をより楽しくするため、動物のぬいぐるみをバトン代わりに用いる。 ☆楽しくゲームに参加している。(行動観察)
第3時	- 英語の挨拶の表現に慣れる。 "My name is ~. What's your name?" "Nice to meet you." "Nice to meet you, too." - ダンス"Left and Right"を楽しく踊る。	(①全) 前時で学んだ英語の挨拶の表現を復習する。 (②) "The Hello song" と"Nice to meet you"を歌う。 (全) 全員で歌う。 (G) グループで歌う。 (P) ペアで歌う。 (個) ソロで歌う。 (③個) ウォーキングゲームを行う。 (①全) 動作をつけながら、歌詞に出てくる英語表現を知る。 (②全) ダンス"Left and Right"を踊る。	・自分の名前の部分を特にはっきりと発音することを意識させる。 ・ソロの部分"My name is ~."は希望する児童で歌うようにする。 ☆積極的に歌っている。(行動観察)
第4時	- 英語の挨拶の表現に慣れる。 - 身の回りの英語の語彙を知る。 book / desk / chair / ruler bag / pen / pencil / eraser - 動作を表す語彙を知り、ジェスチャーと共に、表現する活動を楽しむ。 walk / run / swim / fly / jump / sing	(③個) アイドルやスポーツ選手など、自分の好きな人の名前を使って、ウォーキングゲームをし、前時の復習を行う。 (①②全) ピクチャーカードを見ながら、身の回りの英語の語彙を知り、練習する。 (①②全) 動作を表す語彙を知り、ジェスチャーと共に、練習する。 (②全) 動作を表す語彙を用いて"ゲーム Simon says"を行う。	・その人になりきって活動するよう促す。 ☆積極的に相手を見つけ、会話しようとしている。(行動観察) ・わかりやすいジェスチャーをつけて、語彙を印象づける。
第5時	世界の様々な国の名前とその国の国旗を知る。	(②全) "What's this?" "It's ~."のチャンツで、身の回りの語彙を復習する。 (①全) 国の名前と"Where are you from?" "I'm from ~."の表現を知る。	・この段階では、児童は答えの部分だけを言えればよいとする。

5 時	「どこから来たの？」の表現に親しむ。 China / Korea / Canada Japan / Australia / America "Where are you from?" "I'm from ~."	(②全) "Where are you from?"の歌を歌いながら、それぞれの国の名前と国旗に親しむ。 (②G) 国別のグループに分かれて、お互いに出身地を聞き合う (②P) 二人組に分かれて、自分の好きな国を選び、お互いの出身地を聞き合う練習をする。	☆世界の国々に興味を持って活動している。(行動観察及び振り返りカード)
第 6 時	・留学生の出身国の名前とその国旗を知る。Bhutan Myanmar / Thailand ・"Where are you from?" "I'm from ~."の表現に親しむ。 ・ロールプレイで、次時の予備練習をする。	(①全) 前時に学んだ国に加えて、新たに三つの国の名前と国旗を知る。 (②G) グループに分かれて会話練習を行う。 (②P) 二人組に分かれて会話練習を行う。 (②個) ロールプレイで、外国人になった友達と会話練習をする。	・この段階では、本時に新しく学ぶ国が留学生の出身国であることは伏せておく。 ・英語がうまく出てこなくて困っている児童に支援をする。 ☆次時の留学生との交流への関心と意欲を持っている。(振り返りカード)
第 7 時	・英語を使って留学生と楽しく交流する。	(③個) 留学生にインタビューを行い、ワークシートに記入する。 (②全) TPR 活動(頭の上に紙を置き、自分の顔を描く。)を留学生と一緒に楽しく行う。	・英語がうまく出てこなくて困っている児童に支援をする。 ☆留学生との交流を楽しんでいる。(行動観察及び振り返りカード)

4 検証授業の分析と考察

(1) 仮説の検証

ア 行動観察から

児童は、第2時でバトン代わりに使用したぬいぐるみをととても気に入り、そのぬいぐるみを渡しながらかく楽しくゲームを始めた。児童の行動を観察してみると、うまく英語を話しながらぬいぐるみを渡している児童や、わからなくても友達に教えてもらいながら、なんとか英語を話している児童がいた。しかし、中には、「えっ、何て言うんよ」「おれ、言えやんで」「どうしよう、どうしよう」等のつぶやきの声を出し、活動への戸惑いや不安を感じている児童がいた。このような児童の様子は、第2時のみに見られたことで、他の時間には見られなかった。

イ 振り返りカードより

授業後の振り返りカードで、「また英語活動をしたいですか」の問いに対する回答の集計を図4に表した。

第2時のグラフの値に注目すると、第1時の値に比べて、「とてもそう思う」と「少しそう思う」を合わせた値が11.7%減少している。また第3時では、「とてもそう思う」と「少しそう思う」を合わせた値が16.5%増加している。その後、第4時、第5時、第6時と時数を重ねるにつれ、「とてもそう思う」と「少しそう思う」児童が増え、留学生との交流を行った第7時には、ほとんどの児童が「また英語活動をしたいたい」と感じたようである。

このデータから判断できることは、英語表現に親しむ機会を十分に確保し、児

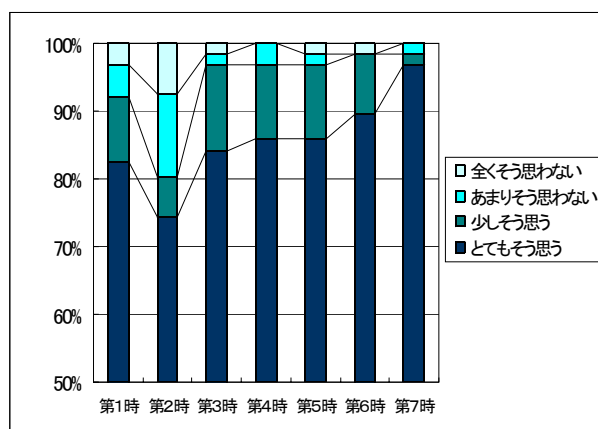


図4 「また英語活動をしたいですか」

童が自信を持って活動できる授業設定をした場合は、「また英語活動をしたい」という次の活動への意欲が高まるが、英語表現に親しむ機会を十分に確保することができずにコミュニケーション活動を行った場合は、児童が活動に対して不安感や抵抗感を持ち、次の活動への学習意欲の低下が見られるということである。

ウ 着目児童について

(ア) 事例 1 (A 児)

A 児は、教師との関わりを好み、手伝いをしたり話しかけたりという行動がよく見られるが、交友関係はやや狭い。また普段から控えめな行動が多く、みんなの前で自己表現をすることが苦手である。困難な状況に出くわすと、うまく対応できずに動けなくなってしまうこともある。

ここに、A 児の振り返りカードの感想を抜き出してみる。

第 1 時 「楽しかったので、またやりたいです」

第 2 時 「英語がむずかしい。もうちょっとかんたんにしてください」

第 3 時 「左、右、前、後ろに動くの (Left and Right のダンスのこと) はむずかしくてついていけませんでした」

第 4 時 「水とうは、英語で何ていうのですか」

第 5 時 「今日は、ちょっとむずかしかった。飛行機は何ていうのですか」

第 6 時 「今日は、練習でもちゃんとといえなかったのに、本当に外国人と話をできるかわからないです」

第 7 時 「はじめ、留学生と話すのが、はずかしくてわからなかったです。でも、先生に教えてもらってちょっと自信ができました。またこんどやりたいけど、やるとしたら、簡単なようにしてほしいです。楽しかったけど、緊張して言うのがむずかしかったです」

この児童は、第 1 時は比較的楽しく活動できているが、第 2 時には「英語がとてもむずかしい」と書いている。「名前をたずねるリレーゲームが楽しくできたか」に対する質問の回答は「あまりそう思わない」で、難しさを感じたようである。しかし、第 3 時には「ダンスがむずかしくてついていけなかった」とは書いているが、「名前をたずねるリレーゲームが楽しくできたか」に対する質問の回答は、「あまりそう思わない」から「少しそう思う」に変化している。また、第 3 時、第 4 時と回を重ねた結果、だんだんと自信がついてきたのか、第 4 時の活動時には自ら挙手をし、「The Hello Song」のソロの部分を使った。A 児がこのような積極的な活動をしたのは、初めてのことであった。また、この時間から振り返りカードに「水とうは英語で何ていうのですか」とか「飛行機は何ていうのですか」と他の英語も知りたいという英語学習への意欲を見せている。

慎重な A 児にとって、英語は決して簡単なものとは思えないようであるが、仮説のように指導法を工夫することにより英語に対する意欲を引き出すことができると言える。

(イ) 事例 2 (B 児)

B 児は、陽気で明るい性格である。1 学期には、学習に対する意欲があまり高くなく、忘れ物をすることや宿題をしてこないことがよくあった。しかし、2 学期に入ってから、学習意欲が少しずつ高まり、宿題を忘れることが減り、字もしっかりとした筆圧で書くようになってきた。

B 児は、第 2 時の活動では、うまく英語を活用できずに、十分にコミュニケーション活動を楽しめない様子であった。その日の振り返りカードの評価欄には、全て「まったくそう思わない」に○を付け、自由記述欄には、「おもしろくなかった」と書いていた。

けれども、次の時間からは、毎回の振り返りカードの評価が「とてもそう思う」に変わり、「自分の名前が英語で言えるようになったから楽しかった。きりんは英語で何ていうのですか」「ダンスが楽しかった。さめは何ていうのですか」「フライパンは何ていうのですか」というように「楽しかった」という記述が表れ、

英語に対する興味もわいてきている。

第7時の感想では、「遠いところから来た人とあまり話せませんでした。また英語活動をしたけれど今日で終わりなのでできません。あんまり英語を覚えていないので、違う国から来た人にあまり話せませんでした。また英語活動があれば、もうちょっと覚えたのに、いやです」と留学生とうまく話すことができなかった自分への悔しさをのぞかせる反面、もっと英語活動をしたいという意欲を見せている。

以上、児童の行動観察と振り返りカードの記録、二人の着目児童の様子から仮説の検証を行ってきた。その結果、第2時のように、「英語表現に親しむ活動」を十分に行わずに、個人で英語を使用しなければならないような活動を設定した場合、児童にとって心理的な負担が大きく、その活動を楽しむまでに至らない場合が多いことが検証された。それに対し、英語表現に親しむために、活動形態を工夫して、その表現に接する機会を多くとればとるほど、児童は自信を持ってコミュニケーション活動に参加できるということが検証された。

(2) 授業を終えて

授業時数を重ねるにつれて、「鉛筆は英語で何というのですか」「下敷きは?」「学校は?」と児童は次々に自分の周りのものを英語で何というか知りたがるようになった。児童が英語に興味・関心を持ち、英語を学びたい、知りたいという意欲が芽生えたためと言える。それらのすべてを活動に反映していくことはできなかったが、できるだけ児童の意欲を大切に活動を進めた。

授業後の振り返りカードで、「また、英語活動をしたいですか」という問いに、多くの児童が4段階評価の4「とてもそう思う」に○を付けている中で、自分で7段階評価にして7に○を付けている児童や、4に花丸を付けている児童がいた。児童が英語活動を楽しめる活動と捉え、次回に期待していることが伺える。

第7時で、韓国、タイ、ミャンマー、ブータンからの留学生との対面を緊張した中で迎えた児童たちの発した第一声は、どちらのクラスも、「あれ、日本人やんか」であった。日本人と同じような顔立ちをした外国人がいるということは、児童にとって大きな驚きだったようである。外国人だとの説明を聞いても、初めはなかなか納得できないようであったが、彼らと英語を使って交流し、彼らの出身国を知るに従い、納得したようであった。また、留学生たちは、英語も日本語も勉強しているのだと知って感心したようである。民族や国籍が異なっても、英語という共通の言語を通して分かり合えた瞬間であった。

さらに、国際交流の場として、給食を一緒に食べる機会を設けた。ソーラン節のダンスやリコーダーの演奏を披露して、食事を一緒にする中で、児童は留学生とすっかり打ち解けることができた。また別れ際にはサインをもらって、それぞれの国の文字に関心を示す児童もいた。



写真 留学生にインタビューをしている児童の様子

5 研究のまとめ

コミュニケーション能力は、児童がコミュニケーション活動に意欲的に参加し、そこで得た自信と経験を積み重ねることで育成できると考える。そのため、児童の英語を話したいという意欲をいかに高めるかを中心に研究を進めてきた。

(1) 成果

英語を使ったコミュニケーション活動を行う前に、そこで使われる英語表現に十分親しむ活動を効果的に行うことで、児童が自信を持ち、より積極的にコミュニケーション

ョン活動に参加できるようになった。また、英語表現に親しむ活動では、その活動が楽しいだけでなく、英語が話せるようになった、知らなかった言葉を知ることができたといった児童の知的好奇心を満足させるような楽しさを盛り込むことの重要性を改めて認識した。

さらに、活動を行う際には、全体活動、グループ活動、ペア活動、個人活動という活動形態に配慮して指導することにより、児童が抵抗感を持つことなく活動に親しみ、英語に対する関心が高まり、もっと知りたいもっと話したいという次の活動への意欲付けとなることがわかった。このことから、英語活動においては、扱う言語材料や教材を厳選しなければならないのはもちろんのことであるが、児童が英語に対する不安感や抵抗感を持たないようにするため、活動形態に配慮することが重要であると言える。また、年間授業時数の関係で、十分な活動時間が確保できない場合には、全体活動やグループ活動を中心にプログラムを組み、個人活動を行う際には、十分な配慮のもとに行う必要があるとも言える。

児童が学んだ英語を実際に活用する場の設定として、留学生との交流を計画した。

「留学生と英語を使って交流をする」という目標を持たせることにより、児童は「うまく話せるかな」と心配しつつも、毎時間意欲的に活動し、最終時には留学生との交流を楽しむことができた。このように、学習した英語を実践的に活用する場面を設定することは、児童の英語学習への意欲を高めるために有効であった。また、このような学習を通して児童は、英語が世界とつながる言語としての役割を果たしているということに気づき、英語に対する意欲や関心が高まっただけではなく、異なる国の文化の相違点や共通点にも気づき、世界に目を向けて興味や関心が広まっていった。

(2) 課題

今回の検証授業は、「総合的な学習の時間」の開始年齢である第3学年を対象として行った。今後この研究の内容を発展させ、他学年においても実践を行う中でさらに研究を深めていきたいと考えている。

また、英語活動を系統立てて実践していくために、中学校との連携をも視野に入れ、高学年までを見通した活動計画を作成することが必要である。その際には、文字と音声をつなぐための指導法や、英語の聞き取り能力を高める指導法などについて、特に研究し、指導計画作成に役立てていきたいと考えている。

「英語を実際に活用する場の設定」については、今回行ったような留学生との交流以外にも、地域に住む外国人との交流やテレビ会議システムなどを幅広く取り入れ、様々な場の設定を考えていく必要がある。

本研究で得られた成果をもとに、勤務校のみならず地域の学校とも情報交換や教材研究を共に行いながら、「英語活動」の一層の充実発展に尽くしていきたい。

〈引用文献〉

- ※1 文部科学省 『小学校英語活動実践の手引』 開隆堂出版 p3 (2001)
- ※2 文部科学省 『小学校英語活動実践の手引』 開隆堂出版 p21 (2001)

〈参考文献〉

- ・仲田利津子著 『こうして教える子どもの英語』 株式会社アプリコット (1993)
- ・金森強編著 『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』 教育出版 (2003)
- ・塩澤利雄・伊部 哲・園城寺信一・小泉 仁共著 『新英語科教育の展開』 英潮社 (2004)
- ・特定非営利活動法人 小学校英語指導者認定協議会編著
『どうなる小学校英語「必修化のゆくえ」』 株式会社アルク (2004)
- ・大津由紀雄編著 『小学校での英語教育は必要か』 慶應義塾大学出版会 (2004)
- ・金森強著 『英語力幻想』 株式会社アルク (2004)
- ・松川・子著 『明日の小学校英語教育を拓く』 株式会社アプリコット (2004)